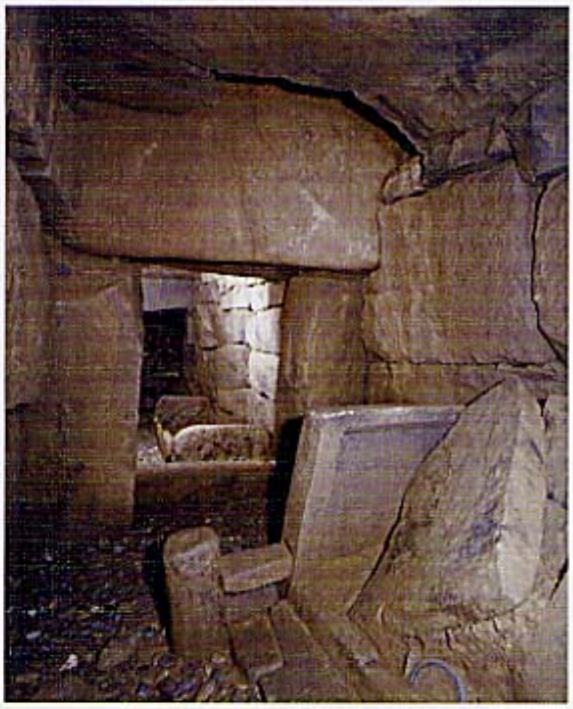
ISSN-0287-9239
1984年(昭和59年)7月23日第三種郵便物認可 2008年9月1日発行(毎月1回発行)通巻325号

文化財発掘出土情報

歴史・考古の情報誌

巻頭グラビア

島根県出雲市
中村１号墳



◇写真／中村1号墳　石室

主な収録遺跡

北海道厚真町　**オニキシベ２遺跡**
副葬品に刀８本　矢筒は道内最古

滋賀県彦根市　**塚乞手古墳**
鳥形の木製埴輪原形出土

福岡県宗像市　**田熊石畑遺跡**
青銅武器１４本に

沖縄県宮古島市　**長墓遺跡**
安山岩のたたき石出土

2008.9

INFORMATION

各地の動向
学界動向
博物館情報
調査報告書・出版案内

INFORMATION

各地の動向

埋蔵文化財調査現場からご提供いただく情報コーナーです。

－目次－

北海道・東北地方

・北海道・登別市・富岸川右岸遺跡・・・・・・(1)

・岩手・花巻市・稲荷神社遺跡・・・・・・・・(6)

関東地方

・栃木・上三川町・上神主・茂原官衙遺跡・・・(14)

中部・北陸地方

・岐阜・各務原市・広畑野口遺跡・・・・・・・(18)

近畿地方

・京都・京都市・上里遺跡・・・・・・・・・・(20)

中国・四国地方

・島根・太田市・梨ノ木坂遺跡・・・・・・・・(23)

・香川・さぬき市・一つ山古墳・・・・・・・・(26)

九州・沖縄地方

・福岡・太宰府市・特別史跡大野城跡・・・・・(29)

・佐賀・唐津市・中原遺跡・・・・・・・・・・(34)

北海道・東北地方

北海道・登別市・富岸川右岸遺跡

－遺跡報告会資料から－

□ 調査の経緯

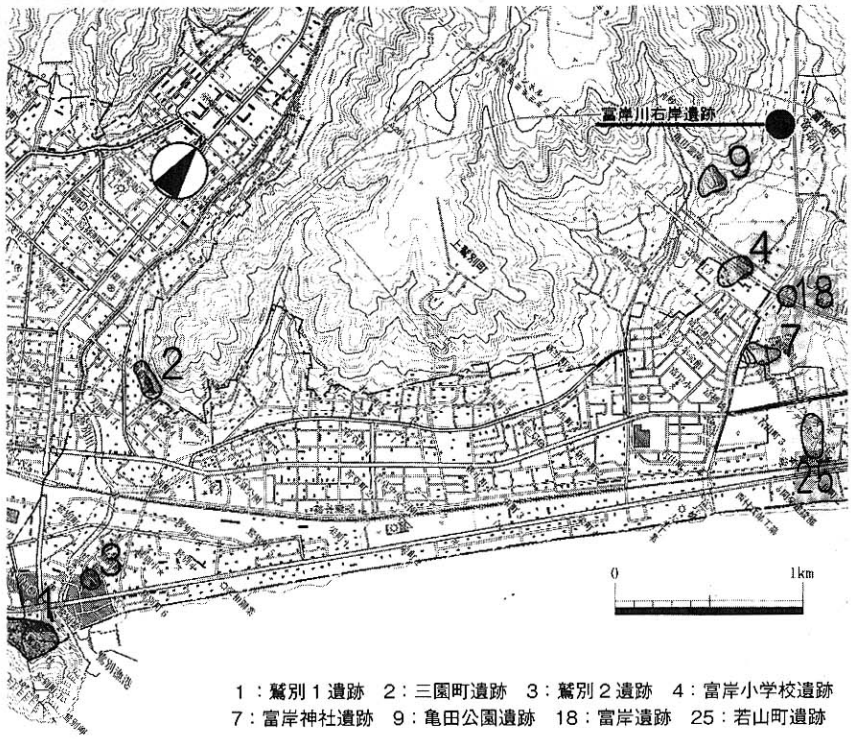
富岸川右岸遺跡は、優良田園住宅建設宅地造成事業（常盤建設株式会社）に伴い、平成19年6～7月に市教委による試掘調査で発見された。10月からの調査開始と同時に予想を超える数のTピットが検出されたため、工事立会区域を発掘区域に変更するとともに開発者と再協議、調査期間を延長し、12月7日に発掘調査を終了した。

□ 遺跡の立地

遺跡は、富岸川に向かって東側に緩やかに傾斜する河岸段丘に位置している。遺跡の南側には段丘を区画する無名の沢があり、背後は急峻な山地となっている。現海岸線より直線距離で約2km、また現河川との比高差は約12～15mである。

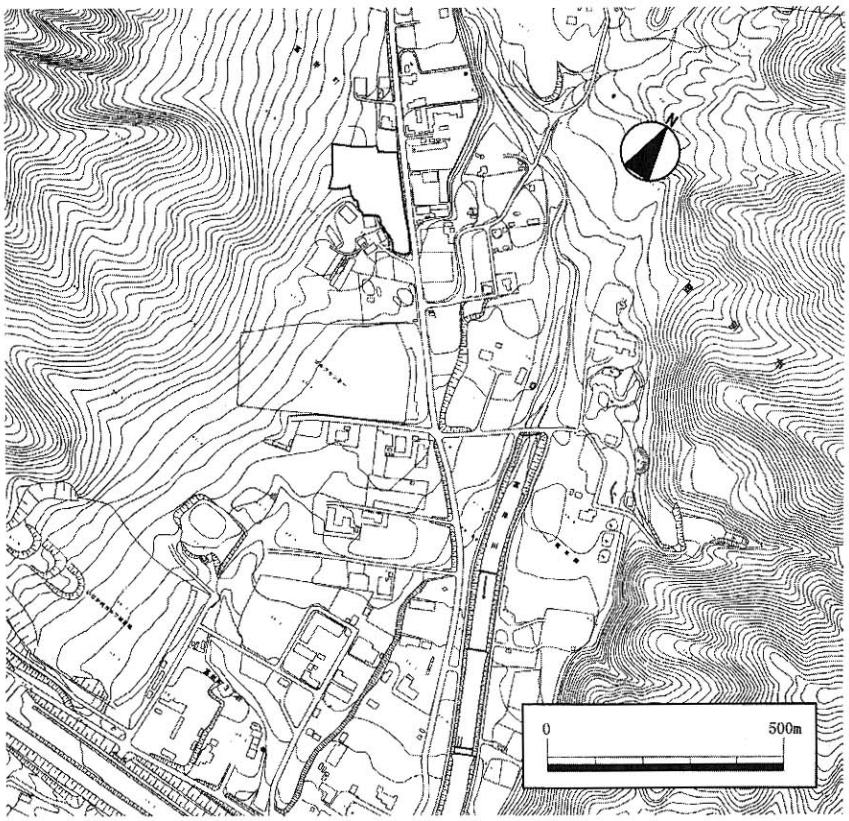
□ 基本土層

Ⅰ層　表土
Ⅱ層　黒褐色土（耕作土混）
Ⅲ層　有珠ｂ火山灰（1663年）
Ⅳ層　黒色土　遺物包含層
Ⅴ層　褐色土　遺物包含層
Ⅵ層　黄褐色土

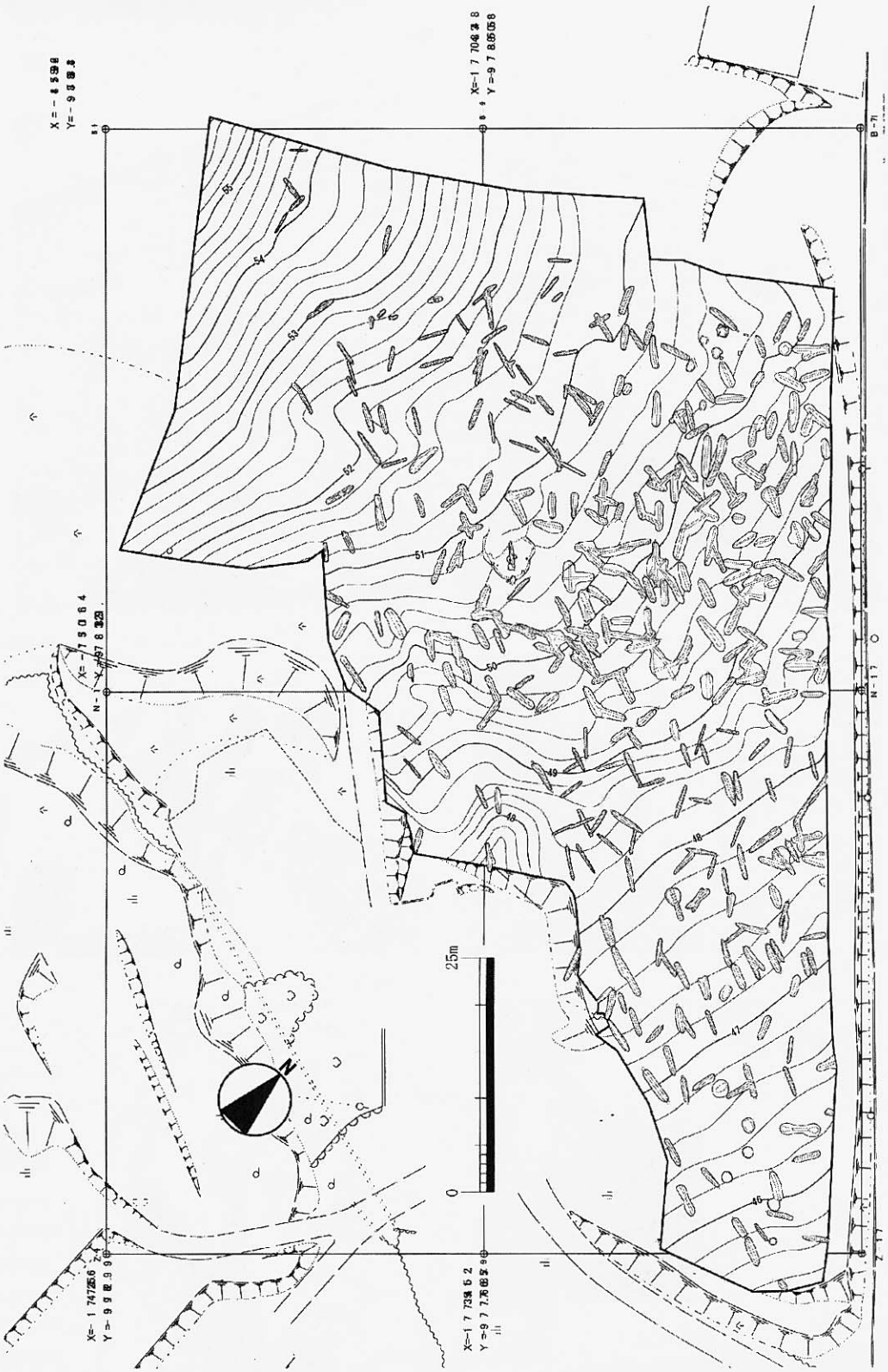


1：鷲別１遺跡　2：三園町遺跡　3：鷲別２遺跡　4：富岸小学校遺跡
7：富岸神社遺跡　9：亀田公園遺跡　18：富岸遺跡　25：若山町遺跡

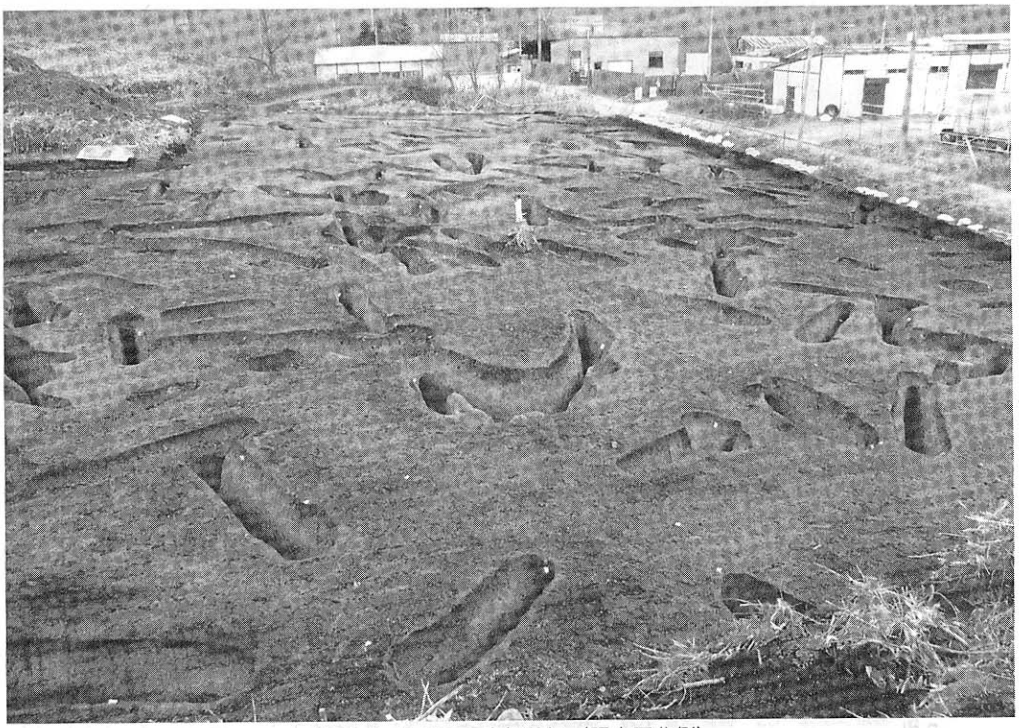
第１図　富岸川右岸遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　富岸川右岸の周辺地形図

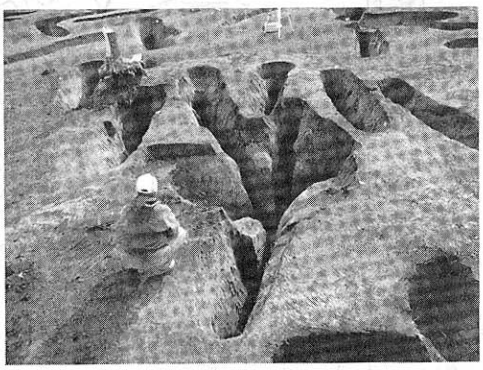


第３図　遺構配置図

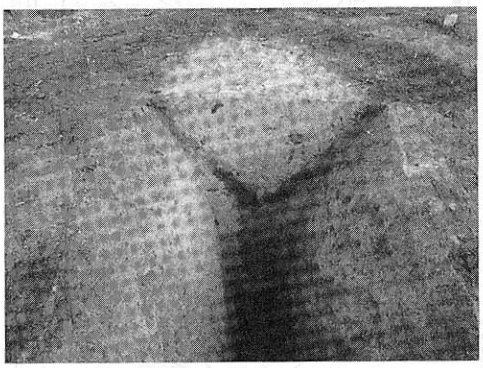


第４図　Ｔピット完掘状況（調査区北側）

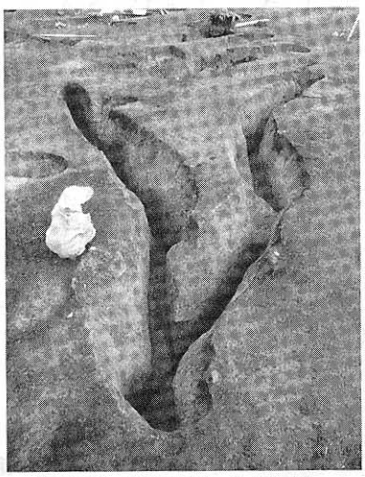
第５図　埋められたＴピット



第７図　完掘状況　４基重複



第６図　埋められたＴピット



第８図　完掘状況　６基重複

□ 遺構・遺物の概要

竪穴式住居：２軒検出された。ともに石囲炉と先端部ピットを有する。炉が２基あり建替えが行われている。１軒がＴピットと重複しており、住居のほうが新しい。もう１軒の石囲炉は、炉石が抜き取られⅤ・Ⅵ層土で埋められていた。時期は、住居の形態からともに縄文時代中期後葉と想定される。

Ｔピット：379 基検出された。調査区のほぼ全域にわたって検出されたが、分布密度は一様でなく、標高 49 ～ 50m ラインである中央部が最も濃く４～５基重複しているものも多く確認できた。標高が高い場所は密度が薄かった。

大きさは、長軸が１～ 4m、短軸（下場）が 0.1 ～ 0.7m、深さ（検出面より）は 0.6 ～ 1.8 mである。形態は、溝状が主体であり、ほかにいわゆる小判形のものが一部見られた。

底面から、杭痕は確認できなかった。いくつかのＴピットからは掘削痕と考えられる幅 10cm 程度の鍬状の痕が確認できた。

土壙：17 基検出された。平面形態は直径 0.5 ～ 1m の円形で、深さは 0.3 ～ 0.6m である。

その他：焼土、土器集中など。

遺物：約 2,000 点出土。出土遺物のほとんどがＴピットの最終自然堆積層であるⅣ層の落ち込み土からである。中には、ごくまれにＴピットの最下層の黒色土・褐色土から出土する場合もあった。

出土遺物のほとんどが縄文土器であり、時期は中期後葉～後期初頭（榎林式・煉瓦台式・余市系など）となっている。石器は、石鏃（黒曜石）、つまみ付きナイフ（頁岩）、石斧（泥岩・片岩）、砥石（砂岩）、台石・石皿（安山岩）などが出土している。

□ 調査成果

分布密度の濃さ：これまで検出例の少ない胆振西部において１遺跡で多くのＴピットが検出されたことは、今後同様の立地においてＴピットが多数検出される可能性を示唆するものである。

また全道的にみても、Ｔピットの分布密度が濃いといえる。藤原（2005）の報告資料をもとに 1,000 ㎡あたりの検出数で比較したところ、富岸川右岸遺跡は 71 基と全道で最も密度の濃い遺跡であることが判明した。

人為的埋土：平面および断面において、人為的な埋土と考えられるパミス混じりの黄褐色土を多くのＴピットで確認することができた（第５図）。多いものでは、穴の半分近くまで埋められているものもあった（第６図）。何らかの理由で、まだ埋まりきっていないＴピットの窪みを平坦にする必要があったことが想定される。

重複：高密度であったためおのずと重複する例が多かった（第７・８図）。標高 49 ～ 50m ラインにおいてとくに重複が著しかった。

それぞれ構築されている方向は異なるものの、当時の縄文人にとってその地点が落とし穴猟に適していることが共通認識としてあったことが想定される。

住居との関係：多くのＴピットの中に竪穴式住居が２軒検出された。Ｔピットとの重複は１例であり、土層の観察から住居が新しいことが判明している。

この例が全てのＴピットに当てはまるわけではないが、Ｔピットが野生動物を捕獲するための猟の施設という性格を有する以上、住居とその他のＴピットとの新旧関係も住居が新しいのではないかと現段階では考えている。

今回、調査の開始が秋からとなり、また予想以上に遺構が検出されたため、調査終了が 12 月となってしまった。遺構数に対し限られた時間内での調査であり、悔いが残る部分もあるが、近隣市町村や遠方から助けに来てくださった多くの関係者の方々のご協力があったからこそ無事に現場の調査を終了することができました。

[参考文献]
藤原秀樹　2006「Ⅳ　まとめ」『早来町　富岡３遺跡・新栄２遺跡』早来町教育委員会

（提供・北海道登別市教育委員会）